

- 開催日時 令和2年2月7日(月)15:00～17:00
- 開催場所 大阪府西大阪治水事務所 1階会議室
- 出席委員 浅野委員、梶原委員、蔵治委員、鍋島委員、藤田委員、増田委員 以上6名(五十音順)

## ■審議議事要旨

### ◆令和元年度までを徴収期間とする森林環境税による森林環境整備事業の令和元年度実施状況および2年度実施予定について

#### 持続的な森づくり推進事業（人材育成）

○3月に報告会を開催するということが、どんな方が参加されるのか。山主や川中、川下の方にも参加していただくことが望ましいと思うがどうか。

⇒今回は、林業事業体など、川上の方を中心に、講座に参加した感想や今後の抱負について意見交換する予定。毎年、事業成果について府民説明会を開催しているので、その中で、山主をはじめ、川中、川下の方にも、事業内容を知っていただけるよう検討していきたい。

#### その他

○昔は財産区という形で、森林を守り収入も得られていたが、今はお金にならない。今後、山に手を加える人がいなくなったら、森はただ荒れていくだけ。これは、国が責任をとっていただかなければいけないと思う。

⇒今年度から、国の森林環境譲与税が始まり、来年度には譲与額が2倍になる。この税を有効に活用し、経営の成り立つところ、自然に戻すところなど、ゾーン分けし、山を守っていくことが重要と考えている。

### ◆令和2年度以降を徴収期間とする森林環境税による森林環境整備事業について

#### 危険渓流の流木対策事業

○現在の税による流木対策事業と、新たな税による流木対策事業では、同じ地区の記載があるが、渓流の場所は違うのか、又は同じ渓流で異なった対策をするのか。

⇒大字が同じだけで、違う渓流で対策を実施する。また、場所が違うことがわかるよう、資料に注釈をつける。

○実施場所は、図面上で絞り込んだ後、現地調査により56箇所には絞っているが、どういう点を重視して絞り込んだのか。

⇒府の職員が現地に赴き、渓流内で小崩壊が発生していないか、危険な倒木が多数存在しないか、渓床に土石が堆積していないか、という観点で点検し、56箇所には絞った。

○実施場所を絞り込む場合に、下流に民家や農地が広がっているところなどを優先することで、被害が減ると思うのだが考慮しているのか。

⇒図面上で絞り込む際に、下流の保全人家数や既設ダムの有無、渓流の勾配などを調べるなど、想定被害規模を考慮して選定している。

○減災対策の防災教室は、どういった人を対象にどのような内容で実施しているのか。

⇒事業を実施する下流の保全対象人家のある自治会単位で実施。実際に現地にも来てもらい、事業の内容や渓流の危険箇所、管理歩道の状況等の説明などを実施している。

## **都市緑化を活用した猛暑対策事業**

○年度毎の予算は、どれ位の額を想定しているのか。

⇒次年度から事業採択を進めていく中で、標準的な事業費も出てくるので、それを見ながら後年度以降の予算を整理し、トータルとして15億円の事業を実施できるように進捗を図る。

なお、最初の事業年度となる次年度の予算は、総額の4分の1にあたる3億7,500万円を要求している。

○税金を使って、駅前広場やバス停を対象に1分の1の補助を行う公的な意味を説明されたい。

⇒府はイニシャルコストを1分の1補助するが、補助事業者となる市町村や公共交通事業者等には維持管理費を負担いただくこととしており、約15年間でイニシャルコストと概ね同額の負担となり、このように大阪府と補助事業者が協働で、この猛暑対策事業を実施する。

○事業採択における優先順位の設定について、大阪府の景観計画に合致していることを条件にしているとの説明があったが、市の計画は、その対象とならないのか。

⇒市町村の景観計画も対象となる。

事業者から提案された内容が、各市町村あるいは大阪府の駅前における景観デザインのガイドラインに合致しているか確認を行う。

○この事業については、実質的に涼しく感じる空間ができて、熱中症のリスクの啓発にも繋がるとの考えの方が良い。熱中症対策のモデル的な啓発事業の1つであることを、しっかりと説明すべき。

○増税を府民にお願いしているとの趣旨から、都市の緑が有する公的機能を維持増進するとの条例の目的にふさわしい事業となるよう、十分に配慮した公募の実施要領にしていきたい。

## **◆令和2年度以降を徴収期間とする森林環境税による森林環境整備事業の評価指標について**

○アンケート調査については、継続して事業効果を評価できるよう、しっかりと制度設計を行った上で実施すべき。

○WBGTの測定については、測定方法や比較対象の選び方などについてマニュアル的なものを作成して実施すべき。また、これにアンケート調査を上手く組み合わせ、涼しいと体感してくれる人が多くなったか否かという評価を組み合わせると良い。

○都市の緑の有する公益的機能が、どれだけ維持増進されたかということに直接結びつく何らかの項目を評価指標に入れるべき。